

**風紀委員少女と
ゆるふわ素行不良少女が
夕暮れの中学校で
閉じこめられない部屋に
閉じこめられる話**

ある夕方、市立城北じょうほく北中学校2年E組風紀委員・武本たけもと真希まきがなにか不可解な居眠りから目を覚ますと、自分がよくわからない部屋で床に大の字に横たわっているのを発見した。

——んー……あれ？

黒縁の眼鏡の中で、真希まきは二度三度と目を見開く。
ぼやけた視界が、すこしずつ鮮明になる。

目に入ったのは、無機質な白い天井。

それと、その天井を染める、夕暮れらしい濃い茜の色。

——なに、してるんだっけ、私。

頭の中もぼんやりもやがかかったように、けだるげで記憶と認識がはっきりしない。

ただ——短い髪の後頭部と、制服の冬服の背中越しに伝わるひんやりと硬い感触は、自分が床にあおむけに横わたっていることを伝えてくる。

しかも、こう。腕は横に、脚はひらいて。思いきりではないけれど、大の字というやつである。

「」

真希は眉をひそめて脚を閉じながら、唇をややへの字気味の横一文字に結んだ。

普通にすましているときでも「もしかして機嫌悪い？」といわれがちで不本意な武本真希であるが、いまは少々ほんにご機嫌ななめめである。

——貧血でも起こしたかしら、こんな場所でみつともないったらありやしない。

どうしてこうなったのか、倒れるまでのいきさつも記憶にない。最後に憶えているのは帰りのH^{ホームルーム}Rが終わって、下校時間見回り当番の時間まで図書室でも時間をつぶそうと教室を出たあたり。

勢いをつけて半身を起こし、その拍子でずれた眼鏡を両の指

でいらだたしげに整える。

前側の壁、黒板の上にかかる古い時計の文字盤が示す時刻は四時四十四分。四ぞろいだ。気にするたちではないけれど、なんだか縁起が悪い。

夕暮れの空の見える窓と、黒板と教卓と、灰色の先生用事務机。

倒れたのはいつもの教室か。誰にも起こされてないし保健室に運びこまれてはいないということは、手足を大の字に広げたこの姿を誰にも目撃されてはいないということ、それに関してほっとする。

隙をさらしてしまつては、明日からの風紀委員としての仕事に支し障りが出る。それなりに敵の多い身の上なのである。

特にこう、あの、すみれのやつなどに見られた日には何を言われるか――

そこまで考えたところで、真希は息をつぐんだ。

気づいたのだ。

ここは、普段の教室などではないことに。

生徒用の机と椅子が、ひとつもなかった。

自分が座り込んでいるのは、部屋の真ん中の広々とした板床の上。

何かの事情で掃除時間のように机を後ろに寄せているのかしら。そう考えて巡らせた視線は、更なる違和感をもたらした。教室の後ろ側にも、やはり机や椅子はなく……そして、そればかりか。

後ろのロッカーに、荷物がひとつとして入っていない。

——空き教室？

いよいよをもって、倒れる前の自分の行動が怪しくなってきた。

この中学校に空き教室はあるにはあるが、それは旧校舎の各階にひとつずつくらい。真希たちの二年生の教室からは、渡り

廊下を挟んでかなり離れている。

当然今日は、ホームルームH Rが終わってから旧校舎に足を踏み入れた記憶などない。

——いや、でも——ちよつと待ちなさいよ、私……

両のこめかみに三本ずつの指先をあて、真希は眉を八の字に
してうつむいた。

記憶はやつぱり戻ってはこない。こないけれど、自分が空き
教室に入ったとすれば、心当たりのある要因はひとつしかない。

先々週の放課後、空き教室にひとりて勝手に入り浸ってマン
ガを読みながらポテトチップスを食べていた湖東ことうすみれを、

あのバカを小一時間ほど説教したばかりで。

なのでたぶん。私が空き教室なんかに入るとしたら、またあいつが悪さをはたらかないかを見回っていたのに違いない。

——ああもう、まったく！

唇をアルファベットのMの字めいた形に結んで、真希は息をついた。

なんだかよくわからないけれど、こんなことになったのはすべてすみれのやつが悪い。

とはいえ。

だとしたら、こんなふうに大の字に寝っ転がっているのを偶

然あいつに見つからなかったのだけは幸いだったのかもしれない。

見つけたら最後、すみれのやつはさも嬉しそうに「まーき、ちゃん♪」などと声をかけてきたに違いなく――

「まーき、ちゃん♪」

「わああああああつ！」

突如^{とつじょ}耳にすべりこんだ声に、真希は座り込んだまま跳びあがった。

床にぶつけた尾てい骨が痛かったけれど、いやしかしそれどころではなく。

ぎんっ！ と音が鳴るくらいの勢いとまなざしで、半身ごとターンして向き直る。

どうして今の今まで気づかなかったのかという、死角となった自分の真後ろ。

部屋の壁に背中をあずけ、くずれた体育座りで——風紀委員・武本 真希の宿敵はこちらを見つめていた。

ゆるやかにウェーブのかかる、かすかに色の抜けた栗色の長い髪。

薄いけれども校則違反の、パールピンクの口紅と化粧。その化粧が似合ってしまったう、とろんと甘く整った面立ち。

同じ二年B組の、遅刻無断早退授業さぼり常習犯・湖東ことうすみれ。

「なっ、あっ、っ、と、」

なんであんたがここにいるのよ一体これはどういうことなのよ！ という心中の詰問は高速すぎて言葉になってくれず。人差し指をすみれにつきつけた腕をぐるぐる跳ね震わせて、真希は真っ赤になった。

「おちつこうよー、まきちゃん」

ゆるつとした声でたしなめられた。

「でも、よかったあ、ずうつと目を覚まさなかつたんだもん。ちよつと心配になつちやつた」

まつ毛の長い、過分に愛嬌のある目を細めてすみれのやつは微笑む。

瞬時、脳の中におけのわからない熱が弾けた。

「つ——、私だったから別にいいけど、人が倒れてたらさっさと保健の先生に知らせに行くのが常識でしょ！ 病気とか、頭打って倒れてたんだつたらどうすんのよ！」

膝立ちひざになつてあげた怒りの声に、けれどもすみれは困り

眉の笑みとともに首をかしげる。

「行こうって思ったよう。でも、無理だったんだもん」

「無理って——なにを、——って、そもそもなんなのよ、どこよここ!？」

直立不動の姿勢になって、肩をいからせる。

「なに？ まさかあんたがなんかしたんじゃないでしょうね」

「ちがうよー」

ふわふわはらはらと、すみれは手のひらを振る。

「どこよここ——って言われても、わたしもわかんないもん」
わけのわからないことを、パールピンクの校則違反の唇は告

げる。

ああ、もういい。

真希はつかつかと歩み、教室後ろ側の引き戸を勢いよく開け放った。こんつ、と音をたてて跳ね返った戸が目の前を塞いでしまったので、いまいちど今度はそうつと開けて、腹立たしげな大きな一歩を廊下に踏み出す。

「あ——まきちゃん」

すみれが声をあげたけれど、知ったことではない。そのまま真希はつかつかと廊下を歩みだし——

びよんつ、という奇妙な音が、耳元で——むしろ耳の中、頭

の奥に響いた。

引っぱったゴム紐を放したときの音を、電子的にしたような。その響きとともに、視界が切り替わる。

「——え？——」

まるで、雑に切り貼り編集した動画みたいに。

眼鏡のレンズの向こう、視界に映るのは夕暮れの窓と、黒板と、机椅子のない教室の風景。

上履きの足が床を叩いて着地した。

目を見開いて、真希は首を巡らす。

「——ね？」

斜め前の床に座ったすみれが、憂いを帯びた表情でこちらを見あげていた。

「納得、してくれただ？」

苦笑とともに紡つむがれた声に、納得なんぞでできるはずもない。ただ、一瞬遅れて、何が起こったのかという事実だけは真希の脳が把握する。

教室の後ろ側、の扉から勢いよく出たはずなのに、教室の前、の側、の扉から勢いよく入ってきた、という。

武本 真希は、呆然と唇を半開きにして硬直すること五秒。くるりと回れ右をして、目の前にある引き戸を開ける。

いやいやいや、なんか錯覚でしょ。気を失って覚めたから頭
のどこかがへんてこになってるだけであって。

その証拠に、ちゃんと深呼吸して冷静になれば、ほうらこう
やって廊下にちゃんと出ら、れ、

びよんっ、という音ともに、目の前には空っぽの教室と茜色
の空を映す窓。

「ほらあ」

気の毒そうな響きを宿したすみれの声が、さつきとは反対側
の斜め前方から聴こえた。

「だめだよ。わたしも何度か試してみたもん」

呆然とまなざしを巡らし……そこに座り込んだ湖東すみれの位置から、いやおうなしに状況を把握する。

今度は、教室の前側の扉から出たはずなのに、教室の後ろ側の扉から入ってきていて。

ひくつ、と、こめかみの肌が震える。

感覚は状況を把握して、理性と感情は状況を把握できず。

唇がひとりでに息を吸い込んで——次の瞬間、あらんかぎりの声を空き教室の中にとどろかせる。

「何よっ——何なのよこれはああああっ！」



武本^{たけもと} 真希^{まき}が市立城^{じょうほく}北中学校2年B組の風紀委員になつてから、この秋で半年とすこしになる。

最初の頃は、これみよがしに目の前で校則を破るやつらもいた。

とくに女子の、クラスの中では中心グループにいる小沢井^{おざわい}とか岡島とか。

小沢井などは、委員会決定のH^{ホーム}R^{ルーム}で、

「誰もやりたがらないんだったら、真面目な武本さんに引き受

けてもらおうのががいいと思いまーす」

などと、自分を面白半分のにやにや笑いとともにも風紀委員に推薦すいせんした張本人で。

つつい負けん気が頭をもたげてその推薦を受け、ほかに立候補もいないので委員になったとたんにも、あいつらの嫌がらせではないかという校則違反のオンパレードは始まった。

飴玉を舐めているのを注意したら、「はーい」と不貞腐ふてくされた声とともにその飴玉を顔に向けてふきだされたこともあった。けれど。

おそらく舐めていたのだ。あいつらは、私の執念を。

——挑戦なら受けて立つわよ。

胸に誓って、来る日も来る日も繰り返し繰り返し注意を続け
て。そのつど生活指導担当の先生にも報告して、先生に進言し
て親にも電話をかけてもらって。どんな悪態をつかれても、嫌
がらせをされても、不敵に微笑んで。

そのかいもあつてか、二学期になったあたりから、状況も変
わりはじめた。

小沢井や岡島が、注意をされると舌打ちや悪態は発しながら
も、引き下がって形ばかりは校則違反を改めて、歩み去ってい
くようになったのだ。

辟易へきえきしたのだろう。私が、武本 真希が簡単にはめげないことに。

ともあれ、少なくとも表向き2年B組の校則違反は目に見えて減少したので、風紀委員としては面目躍如めんもくやくじよというものではあった。

が。

伏兵は、思いもかけないところにいた。

幼馴染こなじみの、湖東ことう すみれである。

小沢井たちのグループに属してはいたものの、どちらかというと端のほうでふんわり佇たたずんでいた印象のすみれ。

衣服や行動には随所に校則違反があるものの、少なくとも小沢井たちみたいなのは、私に対する悪意はなかった。

なので、小沢井たちをやりこめてやれば、すみれもおとなしくなると思っていた。もしかしたらつきあいで、あるいは小沢井たちに無理に引きずられて校則違反をしていただけで、すみれの本意ではないのではないか。その強制力が外れれば、保育園のころから友人だった昔のすみれに戻ってくれるのではないかと。いか、などと。

その期待は見事に裏切られた。

小沢井たちが表向きおとなしくなっただけから、すみれは呑気

に校則を破り続けた。授業のサボタージユに、校内での禁止飲食に、服装違反に。

そのたびに注意した真希だったが、ふわふわのらりくらりとごまかしの言葉を述べるすみれには、のれんに腕押しというもので。

最近では、小沢井たちのほうがついていけなくなったのか、すみれはグループとは別に単独行動をすることが多くなつて——その単独行動が、風紀委員の自分の目には余るもので。

このクラスの最後に残った試練であり宿敵が、よりにもよつて旧友の、湖東すみれなのだった。

◆

その、すみれのやつが。この状況で。

わけのわからないこの部屋に閉じ込められた二人きりの相手として、いま、目の前にいる。

「わかるよー、まきちゃんのきもち」

床にへたり込んで肩で息をする真希に、は這い寄って声をかけてくる。

今しがた五回ほど、前の扉から、後ろの扉からかわるがわるに脱出を試みたが、すべて徒労に終わった真希である。

「わたしもさつき、おんなじことして、何なのかなあつて思つたもん」

とろんと甘い苦笑が、目の前に寄せられて。

すんっ——と吸った鼻息とともに肩をいからせ、真希はすみれをにらんだ。

「……よくそんな呑気にしてられるわね」

「ええー？ のんきとかじゃないよう、ちゃんとあわててるもーん」

正座のかたちに膝ひざを落として、すみれはすねた表情になる。あわててる様子なぞ微塵みじんもない。

「でもさあ、落ちついてかんがえないとだめじゃん。出ようと
思っで行ったりきたりしても、くりかえしでくたびれちゃうじ
ゃない？」

「そつ——それはまあ、そうだけど……」
言い返そうとした声が唇の中にこもる。

くやしいけれどもここはすみれの言葉が正論ではある。

というか——実のところ湖東すみれは、とろんとした外見
と口調とはうらはらに、実のところ頭が悪くはない。

保育園のころからの腐れ縁である真希もそれはよく知っているとこゝろで……風紀委員VS校則違反常連という立場で相対するようになってからは、ときどき思い出したようにふわふわ弁の立つところが腹立たしい相手でもある。

「まったく——なんなのよ、ほんとにこれ……」

真希はいらだちの矛先を、不可解なこの状況に向ける。

とはいえ考えたところで、あまりにも常識を超えた事態に考えがまったく追いついていかない。

すみれの前なのでつとめて冷静を装ってはいるが、制服の中の胸の内で心臓の音はかなりリズムを速めてしまっている。

「あんたは憶えてないの？ どうやってここにきたのか」

「うん。たぶん、まきちゃんとおんなじじゃないかなあ」

すみれは困り眉をしかめて、すぐその床を指してみせた。

「まきちゃん、そこにこうやって寝てたよね。わたし、ちやうどまきちゃんと頭がくつつきそうなところで、まきちゃんとおんなじかっこうでこうやって寝てたんだもん」

腕を横にひろげて背を後ろに傾け、すみれはぐでーん、という効果音を口で言いながら上半身だけで大の字の姿勢を示す。

微妙に着崩した制服の、真希とは異なつて多分にふくらみのある胸。

淡くだけれど、甘めの花を思わせる香りが真希の鼻孔びこうに届いた。

「……もうちよつとちゃんと服着なさいよあんた。あと、学校にあんま強い香水つけてこない」

そんな場合ではないのかもしれないが、つつい風紀委員の意識が前に出てしまう。そういえば、制服の右肩に当番の腕章もついたままだ。

「ちよつと強かったかなあ匂におい。でも、香水とかそういうんじゃないよう」

苦笑気味に発された言葉に、真希はすこし頬が熱くなる。匂にお

いが強いものはなんでもひとからげに香水カテゴリーにまとめ
てしまう自分であり、もしかすると今どきの感覚とずれている
のかもしれない。

「でも、そうだねー、ナチュラルなのもいいね！　って新発見
しちゃった。さつき真希ちゃん、ぴたーってして嗅いだときに
石鹼せっけんとシャンプーでいい匂においだったもん」

「——え？」

聞こえた声にきよとんと目を見開き——一瞬のちに真希は、
真後ろに一メートル滑ってすみれと距離をあけた。

混乱で、頬が爆発したようにかあつと熱を帯びる。

「なによあんたそれ!? いったいいつどういうつ——」

「だから、さつきだよ。」

保健室いけなかったってゆったじゃーん? でも心配だったから、胸にぴたつて耳あてて心臓の音きいて、唇のちかくにも耳あてて息してる音きいてたんだもん。そんなとき」

あ——、と、真希はあげかけた声をのむ。

「……ごめん。だったらいいんだけど」

咳ばらいをひとつして、ここは率直にあやまった。自分もし先に目が覚めてこの部屋の状況を知って、すみれがなかなか目を覚まさなかつたとしたら、同じように呼吸数とか心音を確

かめただろう。

いや、でも、胸に耳をあてるとかじゃなく手首の脈でやれよとは思う。

制服の左胸に手をあて、真希は唇を横一文字に結んですみれを見る。錯覚なのだけれど、あてられたというすみれの頬と耳の感触が布地越しに復活するようで。

同じ場所の、すみれのその部分。着崩したブレザーの中で、豊かな曲線を描いた胸のライン。

ひとなつつつこい、嬉しそうな微笑^{ほほえみ}。

「わ、悪かったわねぺたんこで……!!」

言葉が口をついてしまってから、被害妄想一〇〇パーセントであるのが自分でもわかる。

案の定、すみれはきよとんと不思議そうに首をかしげて――数秒してから、こちらの理不尽な怒声の意味に思い当たったようであり。

「やだなー、悪くなんてないよう。じやまがないからまきちちゃんんの心臓の音すつごくわかりやすくて、たすかっちゃったもん」
無邪気なフオローが、真希の引け目と恥ずかしさをストリートに追撃する。頭に石の角がぶつかっただかのごとく、真希は膝立ちひざのまま後ろによろめいた。

「あんだね……！」

もうちよつとこう、デリカシーとかそういうもの考えなさいよ！」

「いやですよ、まきちゃんとわたしの仲じゃないですか」
にへらつと笑って、すみれは手のひらを振る。

「まきちゃんの心臓がどきどきしてるのとか、ひさしぶりにきいたなあ。

おぼえてる？ 保育園のお庭でお医者さんごつことかしたの」

「ひとが聞いたら誤解されそうなこと言わない！」

「ごかいって？　どんな？」

ぱちくりと目を見開いて、すみれは首をかしげてみせた。

ほんとにわかっていないようにも、わかったうえでわざと聞いているようにも見え。

「——っ」

真希は火照^{ほて}ったまま、勢いをつけてしゃんと立ちあがった。

ああああ。

考えてみればそもそもこいつとこんなくだらない言い合いしている場合などではない。この武本 真希ともあろうものが、ゆうに三分は現実逃避していた。

回れ右をして、つかつかと窓辺に歩み寄る。

まがまがしいくらいに色濃い茜の色。見下ろすと、そこに広がるのは見慣れた校庭。

ただ……人の姿はひとつもない。

この時間であれば当然みられるはずの運動部の練習も、端の通路から校門までを通る下校の生徒たちも。

留^{とめ}金を外して、真希は窓を開け放った。すこしひんやりとした夕暮れの風は頬を打つ。

けれども窓を開けたことで、自分が今いる空間の違和はよりいっそう実感できてしまう。

人の話し声や足音どころか、鳥の声や車の走行音といった、普段は無意識に耳にしている音すらも聴こえてはこないのだ。いつもの校庭と街並みをモデルにしたつくくりもののような風景を、色濃い夕陽が染めあげているばかり。

「すみれ」

みぞおちのあたりをきゅつと締めつけてくる不安に、真希は幼馴染の少女の名を呼んだ。

「——こっち側には、なにかしてみた？」

「ううんー。まだ窓も開けてなかったもん」

「そう——」

うなずいてから、真希は思いきり息を吸いこんだ。制服の肩をいからせ、窓の柵から首を外に出して、

「おーーーーーい！ 誰かいませんかー！ もし聞こえてたら、返事だけでもしてください！ おーーーーーい！」

喉と肺活量のかぎりには、呼びかけの声を響かせる。

もちろん、どことなくわかつてはいた。この声が届く範囲の空間に、聞きとつてくれる人間はいないだろうということとは。

とはいえ、試せることは試してみないことにはだ。肩で息をして肺の空気を充填し直すと、真希はいまいちど窓から身を乗り出した。

「おーおーおーい！、!?」

続けかけた言葉は途中で止まる。制服の右肩と右腕に触れる感觸と、鼻に届いた甘い香りに。

「誰かいのないのーおーおーおー!? とーじーこーめーらーれー
てーるーんーでーすーけーどーおー！ ちよつとお！ きいて
ますかー！ でてこーい！ ばーかばーか！」

自分の出した声よりボリュームのある叫びが、すぐ隣で響く。口にあてた両手をメガホンがわりに、湖東すみれは加減なしの声を無人の校庭に響かせた。

その声もやはりむなしく空に消え——ふたりはどちらから

ともなく顔を見合わせた。

溜息をつきながら、真希は気づく。自分の唇が、苦笑と呼ぶには険のない笑みのかたちになってしまっていることに。

肺の空気を残らず使って全力で叫んだためか、すみれは頬を上気させて息を荒げている。珍しいそのさまが、なんだか可笑しくなってしまうたせいだ。

「ちよつと下がってて、すみれ。もうひとつ、試してみたいって思うことがあるの」

窓から離れつつ、部屋の中を見回す。

——ちようど、これがいいかしら。

手にとつたのは、黒板下側のチョーク置きにあつた古い黒板消し。

すこし粉が散つたけれど、つかんで振りかぶつて三步ほど助走をつけて――

「うりやっ！」

開いた窓めがけて、力まかせにぶん投げる。

薄茶色と紺色の黒板消しは、一瞬で視界から外れ、

びよんつ、と音をたてて、置いてあつたのと同じ位置に出現した。

「——なるほど」

肩をすくめて、真希は息をついた。

信じられない現象に次々相対あいたいしているが、すこしずついつ

もの自分のペースが取り戻せてきてはいる。

試せることはひととおりに試して、道を探らなくっちゃだ。

「こつち側もやっぱり、出られるってわけじゃないみたいね。

ま、出られそうでも飛び降りてみるわけにはいかないからあ

れだけど——

——どうしたのよ？」

振り向いて、真希はかすかに眉をしかめた。

こちらを向いて、呆然と目を見開いたすみれがそこにいて。いまの黒板消しの瞬間移動を見たからだろうか。まあ、戻ってくる位置が予想外だったので、私もすこしびっくりしたけど。

「ふわああ。まきちゃんが『どおおうりやらあつ！』とか叫んで窓からの投げるひとだなんて思わなかったよう。

ひとがやったらまきちゃんぜったい怒りそう」
そっちかよ。

あとそんなバカ男子みたいな声はあげてない。

「どう見ても非常事態なんだもの、気にしちゃいけないでし

よ。

それを言ったら、こつちこそちよつと驚いたわよさつき」

自分と並んで校庭に呼びかけたすみれの横顔——この数年あまり見なかつたまなざしの熱を、真希は思い出す。

「あんなしつかりした声出るのね、あんだ。こここのとこ、ほわんとしたしゃべり方しか聞いたことなかつたから」

「ええっ、そうかなあ。ごめんびっくりさせちゃって」

「謝ることないわよ、今のはほめてんだから」

率直な言葉が口をついてしまつてから、すこし照れがきて唇をつぐむ。

けれどもこう、なんだちよつとは真面目な声と顔もできるんじゃない、と見直したのは事実だ。

保育園でいっしよの組だった頃からふんわりほわほわした雰囲気だったすみれだが、ここ最近はなんだかそれともまた違っているように思っていた。

なんだか、何を考えているかの芯が見えないような——その場その場をのらくら逃れてさまよっているような。

なので……叫ぶ、なんてことが出来るのを見て、なんとなくほつとした。

いつももうすこし、色々顔に出したり口にしたりすればいい

のに。

いや、ともあれ、あれだ。そのあたりのことはまずはここを出てからか。

「——そういえばすみれ、あんたスマホとか持つてる？」

「えっ？ ——あ、えっと、あわ」

かけた声に、すみれはなぜだかあわてふためいた。ぼんやりして顔も赤くなっていたし、なんだか挙動不審だ。

「もってる、けど——」

「誰かに連絡しようとしてみた？ 地図とか位置情報は見てみた？」

さすがに電波が繋がってはいないと思うけど、念のために
どんなふうになっているのかだけでも見ておきたい。

「うん——ごめん、まきちゃんにゆったら怒られるかなーって
思ってたまってたけど——」

「怒らないわよ、言ったでしよ非常事態なんだからって」

真希は苦笑し——けれども次の瞬間、眼鏡のなかで目を見開
いた。

すみれがもぞもぞと取り出し、表示したスマートフォン
の画面を見て。

砂嵐。と、呼ばれるような状態だった。

白と黒の無数の点が、画面いっぱいに入り乱れながら砂の濁流のように明滅し、ときおりその画面そのものが波打って歪む。ちいさく音量オンになったスピーカーからは、ザーザーという雨音めいたノイズも聴こえてきた。

「さいしょにやってみただけど、何やってもこんな感じー」
その砂嵐をこちらに向けたまま、すみれは人差し指でぐるぐると画面をタッチする。

言葉の通り、触れるすみれの指にもスマートフォンはまったく反応する様子はない。夕暮れの教室にノイズ音を響かせること数秒、すみれは横のボタンを押して画面と音を消した。

「ごめんねえ、おやくにたちませんで」

「そう？　ちよつとはたったわよ。ちよつとわかったこともあるもの」

「ふえ？」

「スマートフォン——電波が通じないからって、そんなふうにはならないわよね」

校則に従って朝の登校時にロックして職員室にあずけているけれど、自分も両親との連絡の必要性からスマートフォンは持っている。

いまどきは電波が通じない場所なんていうのも珍しいけれ

ど、一時的な障害で通信ができなくなっただけでも、画面の上端のアイコンが通信できていないマークに変わるだけだ。

「もし画面とかが壊れたんだとしても、そんなこれみよがしに『ザーーーーー』なんて音たてないわよ。昔のドラマとかにでてくるテレビじやあるまいし」

「あ——うんうんっ。なつかし系のマンガとかでわたしもみたことあるー！」

目をキラキラさせて片手をあげたすみれはさておいて、「だから、ね」と真希は言葉を続けた。

「なんかのよくわからない原因でこうなっちゃってしまってるんじ

やなくて、何かの仕掛けがあつて切り離されて閉じこめられて
るってことじゃないかしら。

だとしたら、よ。

うまく言えないのだけれど、なにかしたら出られる方法もある
ように思えない？」

「おおー」

胸の前に両手をぴたりとあわせて、すみれはソフトな歓声と
ともにこちらを見た。

すみれのやつの仕草と声はスローかついちいち大ぶりなの
だけれど、ともすればわざとらしい感じが一周回って甘めに可

愛らしく見えてしまうのが、真希的にはもう一周回ってちよつと腹立たしい。

「まきちゃんやっぱ頭いいなあ。ちよつといまいちよくわかんないけど、とにかくいいけそう！ って感じる」

「いや——でもここまで思いついたってだけで、だからってどうすればいいのかは分からないわよ全然」

向けられた憧憬のまなざしに、真希は唇を結んでため息をついてみせる。

一見理詰めっぽく聞こえるかもしれないけれど、かなり希望的観測に寄った推察なので、そんなに純粹にほめられるとすこ

し気恥ずかしく――

「あれ？ まきちちゃん」

唐突に、すみれの声が思考をさえぎった。

「ね。あんなの、あつたつけさつきから」

あんなの？ とたずね返そうとした真希だが、声に出すより早くそれは視界の片隅に入った。

窓際の前方にある、旧いスチールの教師用事務机。灰色の机上に敷かれた緑のフェルトと色あせたビニールカバーの上に。

「なかつたわね」

ひそめた声で応えながら、歩み寄る。一步遅れて、すみれも

机の前に並んだ。

机上の隅に置かれた、すりガラスの、さほど大きくはない花瓶。^{かびん}

その花瓶だけだったら、最初から置いてあつたのかもしれないと錯覚していたかもしれない。けれども。

吸い込んだ息に、すみれの香水にもすこし似た、けれどもそれとはまた異なる花の香りが混じる。

窓から射す夕陽の中、その夕陽の色を色濃くしたような——朱色の花のつぼみが二輪、花瓶に挿されて静かにこうべを垂れていた。